

景観写真の読み取りを活用して理解を深める「インドの生活・文化学習」の授業実践

広島大学附属高等学校 湯浅清治

1. はじめに——写真の活用意義

「地理教師、見てきたようにものを言い」と揶揄されるように、地理学習は現地体験が効果的であり、各種の音声・映像資料が生徒にその地域や事象に対する興味・関心を高め、学習意欲を生じさせる。映像資料のうち、**ビデオ教材**はとくにその動態的場面に効果的で、説明に優れている反面、受動的な学習・理解になりがちである。一方、**写真教材**は景観を留め続けるという特性であるから、隔々まで見つめ続ける学習過程を通して、多様な地理的情報を読み取る学習や他地域と比較して考察する学習などに適しているといえよう。

学習指導要領には「地理的な見方や考え方や地図の読図や作図、**景観写真の読み取り**など地理的技能を身に付けることができるよう系統性に留意して計画的に指導すること」とあり、写真から地理的情報を生徒自らが具体的に見出し、追究する過程を求めるように示されている。

ここで検討する「生活・文化」の単元はとくに、写真から感じ取れる学習内容が多いものである。衣食住にはじまり、生活風習及び社会環境の違いは景観に現れるものであり、一枚の写真から地理的情報として見出すことができる場合が多い。つまり、文化学習に景観写真は有効な情報源となるわけで、生徒にその活用技能を育てる格好の機会となる。それゆえ、教科書には、各種の景観写真が掲載されている。

この拙文は、インドを事例とした「生活・文化」の学習構成と、景観写真を活用した授業の展開例の2つの視点を提示しようと試みたものである。

なお、「生活・文化」学習の構成は、異文化理解が求められる現代世界において、一般的に次のように構造化できると考えられ、この構造図に従った授業の展開例を示すこととする。

- I) 違いに具体的に気づくこと＝異なる生活・文化の地理的事象を読み取る過程
- II) 異なる特徴が生じている背景・要因を追究し理解すること＝地理的環境（地域の自然環境と社会環境）と関連づけて考察する過程
- III) 今日では、国際化や情報化の中で、他地域の影響を受けて変容していることを理解すること＝世界各地の生活・環境が同様になりつつある傾向
- IV) しかし、民族性は帰属意識としての根源的な意義をもつものであり、伝統文化として不易の観点からも理解すること
- V) 以上の学習を通して、交流が進む今日において、文化摩擦をなくすため、異文化を理解し尊重する資質や能力を育成すること

2. 異なる文化と写真の活用

まずは、インドの「生活・文化」の特徴に気づくために、代表的な景観写真から情報を読み取る学習を行う。

1) 図1「インドの家庭における食事のようす」

図1をみて、インドの生活・文化の特徴を挙げさせる。



図1『世界を学ぶ高校生の地理A (最新版)』p.76①

- 右手だけを使っている。左手は不浄とされ使わない。
- 民族衣装サリーをまとっている女性。
- 伝統的な食事（チャパティとカレー、肉を食べない）。
- 食卓でなく床に車座になって食べる伝統的

な居住環境の様子などが読み取れる。

その際、教科書に並置されているヨーロッパ風の食事風景と比較対照する手法も地理的技能として大切であることを学ばせたい。

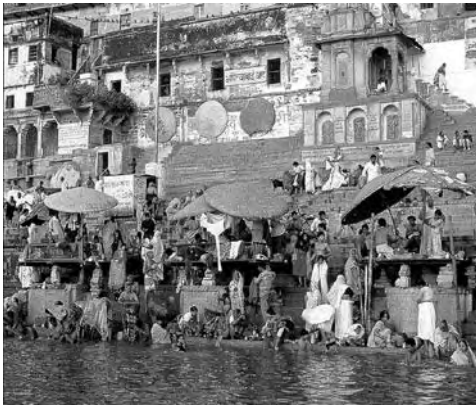


図2 『世界を学ぶ高校生の地理A (最新版)』口絵3③

2) 図2 「ガンジス川で沐浴をするヒンドゥー教徒」

ガンジス川に沐浴することは、宗教がもたらす社会環境として人々が長い間受け継いできた風習である。日本人の感覚では川の水の清潔さが気になるところであるが、「聖なるガンジス」という宗教上の民族性を受けとめさせるのに最適の教材である。果たして、日本の社会で宗教がどれほど人々の生活・意識に関与しているものか、生徒に考えさせることができる。

この学習の目標・意義として押さえるべきことは、インド社会におけるこのような慣習・行動がインドだからという特殊なものでないという視点である。世界の諸民族は、伝統を継承しているもので、それを失くすことは自民族の放棄といえる。日本における例として、初詣や四国遍路にみられる巡礼などを取り上げ、宗教上の慣習・行為として対等なものであると理解させることもできよう。

3. 生活・文化のグローバル化

1) 図3 「インドの街なみ (バンガロール)」・図5 「ジーンズをはいた女子学生(ムンバイ)」

これらの写真からインドらしさを見出すことができるか問うてみる。顔かたちからインド人らしさを感じられるものの、街かどの景観や談笑している若い女性たちの雰囲気はどの大陸のどの国の



図3 『世界を学ぶ高校生の地理A (最新版)』p.86①

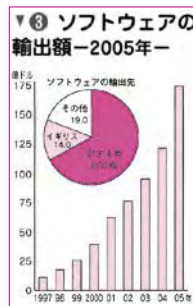


図4 『世界の諸地域 NOW2008』p.77③



図5 『世界を学ぶ高校生の地理A (最新版)』p.86②

都市にもあてはまるのではないだろうか。

現代世界は、経済的に一体化しつつある結果、生活面でも共通した諸相が多くみられるようになり、「物質文明」という面ではどの国も西欧化した社会環境一色となっている。

インドでも、I C産業で世界の注目を集めるほど工業化が進んでいること(図4)を事例に、先進国と同様の街なみや生活様式が各都市に現れていることを理解させる。

4. 民族性の不易と流行

インドの人々の生活や社会において、変化しつつある様子が写真から次々と伝わってくることを生徒は読み取った。「生活・文化のグローバル化」はまさに進行中である。

しかし、そうした風潮の中でも変わらない部分があるのではないだろうか。それが“民族性”であるとして、その不易の要素をどこから読み取ることができるだろうか。

1) 図6 「ハンバーガーチェーン店で食事をする家族」

教科書 p.87⑥「韓国のハンバーガー」をみて、インド社会で販売されるハンバーガーの特徴を考えさせる。一見すると同じような食事風景、同じようなハンバーガーでも、その内実の違いに民族性が反映されていることに気づかせたい。



図6『世界を学ぶ高校生の地理A（最新版）』p.86③

2) 図7「クアラルンプールの街かどのようす」

このバスを待っているであろう人々を見て、多民族からなる社会を感じ取らせるとともに、「私はだれでしょう？」の課題を解かせる。

外国企業が進出しているアジアの国・地域では一般的にみられる光景である。グローバル化した多民族社会の集団においても、民族衣装をはじめとする民族性を維持しているとともに、「この写真からはとらえきれない生活面での差異が潜んでいるのではないだろうか」と問いかける。

異集団が混ざりあえばあうほど人々は自分の存在を安定化させようとして帰属意識を高める。その力になるのが共通の生活・文化であり、そこから伝統的な民族性の自覚が保たれることになる。

そこに不易の民族性を見出し互いに理解し合い、尊重し合うことこそが異文化理解の根本である。



図7『世界を学ぶ高校生の地理A（最新版）』p.78①

5. 共生の国際社会のために

インドには大小さまざまな民族集団が住んでいる。インドの先住民であるドラヴィダ人と北西か

ら侵入したヨーロッパ系住民の分布を読み取りながら（図8）、インドの複雑な民族分布が形成された歴史的背景を理解させる。その多様な民族を統一するためにどのような方策がみられるのか、考えさせたい。

1) 図9「さまざまな言語で書かれているインドの紙幣」

インドの紙幣に多くの言語が印字されている理由を考えさせる。「最も優勢なヒンディー語を公用語とするほうが多民族を1つに統一できて、国がまとまるのではないかと問うてみる。ヒンディー語に統一することは、逆に、他民族から反発を受けることになるという民族の自治意識を気づかせたい。そのため、優勢な地方公用語を多く認めて紙幣に印字する方法をとり、まとめようとしている。互いの言語や宗教を尊重し合い、民族性を認め合う対応が多民族国家のあり方や国際的な民族問題の解決に必要であると感じ取らせたい。

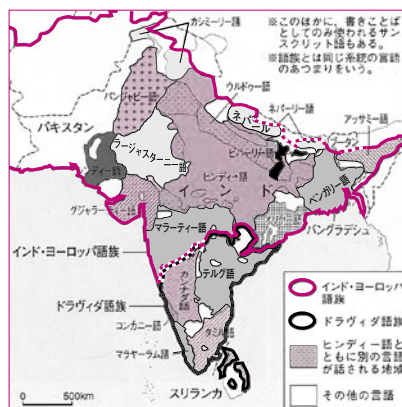


図8『世界を学ぶ高校生の地理A（最新版）』p.80②



図9『世界を学ぶ高校生の地理A（最新版）』p.80①

6. 終わりに

今日の教科書及び資料集には、多様な地理的情報を有する多くの写真が選び抜かれて掲載されている。それらを紐解き、活用しうる能力を磨くことは地理教師に求められる資質の1つといえよう。